

扉の向こうへ

第8部 差し出す手 ①

ひきこもりの当事者を支える行政の取り組みが進んでいない山梨で、「民」を中心に支援の動きが生まれている。

ひきこもりは誰もがなり得る現象だ。だからこそ、当事者のためにできることをしよう。県内各地で広がっている、個人、グループによる支援の動きを見つめた。

〈扉の向こうへ〉取材班

「さあ、行きましょう」。

9日午前6時半、甲府・緑が丘スポーツ公園の駐車場。市内で登山用品店を経営する柳沢仁さん(58)と市山宮町Ⅱの掛け声で、集まった40人が湯村山の頂に向かって一歩を踏み出した。雑談をしながら歩を進める一行のなかに、昨春からひきこもり状態になったシロウ(19)と山中地域、仮名Ⅱの姿があった。

登山愛好家のため、毎週土曜日に湯村山に登る集いを開く柳沢さん。息を切らしながら歩くシロウの隣に駆け寄り、「きついだろう?」でもみんなと一緒なら続けられるんだ」と声を掛ける。そ

山梨発 ひきこもりを考える 52

切れた糸結び直そう

だった。

きっかけは、保坂さんが交流サイト「フェイスブック」に投稿した、ひきこもりを考

える催しの告知記事。柳沢さんは投稿を見て、「山に登れば少しは変われるかも」とコメントした。

柳沢さんは以前、ひきこもりがちの知人と山登りをしたことがある。道中に会話を重ねたことで、知人はわたがまりが少しはなくなったようだった。「山は心の病院」とも

言う。環境の変化は、本人の気持ちの変化をもたらすかもしれないと考えた。

コメントを見た保坂さんから電話があった。「イベントに来てください。登山に興味がある、ひきこもりの子に会ってほしい」。それがシロウだった。

イベントの当日、シロウを紹介された柳沢さんは自己紹介と雑談の後、こう伝えた。「土曜の朝、山に登っているから、よかったらおいで。無

理なくていいから」

シロウはいじめをきっかけに高校で通信制に移った。専門学校に進んだが、いじめにあった経験から集団に入るのが怖く、通えなかった。学校は退学。家族以外の接点を失った。

昨年9月に設立された、ひきこもりの子をもつ親の会「山梨県桃の会」で同じひきこもりの当事者と出会い、変化が生まれた。少しずつ他人と話せるようになり、別の集

いの開催場所である市民活動センターで、所長の保坂さんとも知り合った。

ひきこもりは社会や学校で傷ついて自宅に撤退し、人間関係が途切れたり弱まったりしてしまつた状態。もう一度つながりたいと思っても、ひきこもっている本人の努力だけでは他人と出会う機会を得られない。「外」のサポート、寄り添いが必要だ。



ひきこもり経験のあるシロウ(左)の回復に向け、本人が興味を持つ山登りをサポートする柳沢仁さん。「困っている若者の力になりたい」と語る。Ⅱ甲府市内

この連載へのご意見や感想をお寄せください。記事で紹介させていただくことがあります。郵便番号400-8515、甲府市北口2の6の10、山梨日日新聞社編集局「扉の向こうへ」取材班(ファクス055・231・3161、電子メールkikaku@sannichi.co.jp)。

湯村山から下山したとき、柳沢さんは「この後、一緒に温泉に行くか? みんなで朝食も食べるんだ」とシロウを誘った。見知らぬ他人との風呂や食事。考えもしないことだったが、シロウは「はい」と即答し、自分のミニバイクを走らせた。新たな出会いが待っている場所に向かっ

扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える 53

第8部 差し出す手 ②

3月の休日、甲斐市のファミリーストランで、飲み物を手に会話を交わす若者たちがいた。発言を遮ったり、否定したりする人はいない。テーブルを囲むのはひきこもりの当事者。そこに不登校の経験があり、現在非正規で働くシュンスケ(33)＝甲府市、仮名＝もいた。

シュンスケが若者たちと交流するようになったのは、ひきこもりの子をもつ親の会「山梨県桃の会」と併せて開かれた、当事者の集いに参加したのがきっかけ。昨年の暮れ、図書館で新聞記事を調べていて、集いの存在を知った。

「経験を伝えたい」

シュンスケは小学校の途中から登校できない日が始まり、中学はほとんど家にいた。学校に行けない苦悩や体験を共有したいと、定時制高校に進んでから不登校経験者の交流の場を設けたことも。「ひきこもりに、社会とのつながりが弱まった『経験者』として興味があった」。今年1月、当事者の集まりに足を運んだ。



ここにいる自分肯定を

参加者は15人。ひきこもっている生活や心境をほつぽつと話し出す。「居場所」

スケには、同時に彼らの「焦る」と不安を口にした。「就職したい」と20代の男性。白髪交じりの男性は「40歳にもなると仕事がない」と和感を覚えた。

親や周囲の「世間並みに」という期待を一身に背負い、それに答えられないと苦しみ、自己を否定する。不登校の経験者も同じだった。

数日して、そのうちの一人から「今度みんなで集まるんです」と誘いのメールが届いた。場所は家族連れで混み合うファミリーストラン。食べ物の好みや運勢といったたわいのない話に盛り上がった。集いより開放的で明るい雰囲気を感じた。

ひきこもっている本人に周囲が求めるのは「就職」

や「就学」で、本人もそれを望んでいる。だが、自分を否定する気持ちがある段階で無理をして職場や学校に身を置いて、わずかな失敗で自己否定の気持ちが強まり、再びひきこもりに戻る恐れもある。「まずは自分を認め、他人を肯定できる関係づくりが必要だ」

そんなシュンスケの思いは、当事者の集いから自然に派生したグループで少しずつ実現されている。「今度話そう」「ラーメン食べに行かない?」。気の合う者同士で誘い合うことも増えている。

本当に安心できる、居心地の良い場所が県内各地に広がってほしい。当事者の抱える焦りを和らげ、「回復」に必要な自己肯定の場を大切にする。それを伝えるのが自分の役目だと、シュンスケは思っている。

扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える 54

第8部 差し出す手 ③

「10」。富士河口湖町福祉推進課の松浦信幸課長(55)は、パソコンの画面を見ながら数字を打ち込んだ。町内にいると考えられるひきこもりの当事者の数だ。これまで見えなかった当事者の存在が、初めて数字として明らかになった。

当事者数の把握は、地域住民の「相談役」と言える民生委員を通じて行った。2月、約60人の委員を前に「皆さんの担当する地区で、ひきこもりと思われる人がいれば数を教えてください」と呼び掛けた。簡易な現状把握にすぎなかったが、松浦課長は「貴重な数字。ここから始まる」と受け止めた。

実態を調べようと思ったきっかけの一つは、新聞報

官民協働へ町が実態把握

道だった。「全国に推計70万人」「進む長期化と高年齢化」。記事を読み込むうちに、町の福祉部門を統括する立場として見過ごせない課題だと思ふようになった。理由はもう一つ。同世

「10」からはじめる歩み

ひきこもり調査集計

津立石口山浜湖進栖士
船小大河勝長西大精本富

合計 10人

富士河口湖町が民生委員の報告を基にまとめた、ひきこもり当事者の調査結果。松浦信幸福祉推進課長は「10人という数は最少」と考えている

代の友人が、ひきこもり状態にあることだった。

幼いころ、よく一緒に遊んだ。積極的に周囲をリードするタイプではなかったが、笑顔を絶やさなかった。

昨冬にコンビニで偶然顔を合わせ、「久しぶりだね」と声を掛けしたが、返事はなかった。仕事に就かず、ひきこもっているらしいと知り合いから聞いていた。どんな心境にあるのか。「人

こととは思えない」。当事者への思いを募らせる。

7年前に児童福祉部門に在籍していたときは、「ひきこもり」が話題に上がることはなかったという。青木ケ原樹海を抱える町にと

って、一番の課題は「自殺防止対策」。ほかに障害者や育児の支援策にも取り組んでいる。ところが3年前に課長職に就いてから、ひきこもりに関する相談は増

えるばかり。取り組まなければとは思いつながら、特化した「基本法」や「支援法」がないひきこもりへの対応は手つかずのままだった。

民生委員の報告をまとめ終わった松浦課長は、ふと気になって友人が住む地区の当事者数を調べた。「0」。のは実態調査だった。行政が当事者の数と支援の二つを把握、NPOや民間団

体の協力を得ながら居場所づくりや就労に向けたトレーニングの場を設けている。横浜市は実態調査や相談業務は行政、当事者の居場所づくりは民間と、役割分担しながら社会参加を後押し。山形県は知事の号令で当事者数を調べ上げて公表、民間との協働を掲げ「できることからやっていく」と積極的な姿勢を示している。

富士河口湖町は環境保全や子育て支援の分野で、町と民間団体の連携が進んでいる。ひきこもりの領域でも、町が「困っている人がこれだけいる」という数字を出せば、「協力したい」と声を上げてくれることが期待できる。「まず実態を正確につかむ必要がある」と語る松浦課長。人口2万6千の小さな町だけに、まず「官」が第一歩を踏み出す。そして「民」を巻き込んだ支援体制を築きたい。いま、その思いを強くしている。

扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える 55

第8部 差し出す手 ④

「昔、ひきこもっていたことがあるんです」。1年前、帽子を目深にかぶった60代の男性が切り出すと、車座になった人たちが柔らかな視線を向けた。市川三郷町三珠健康管理センターで毎週金曜日に開かれている、ひきこもりや精神疾患で悩む人が集う「心の拠り所サロン」でこうし。

町民のボランティアが運営していて、関心のある人なら誰でも参加できる。

男性は周りの人の顔を見たり、うつむいたりしながら続けた。「ひきこもりという言葉が、まだない時代のことです」。聞き手は話を遮らず、ただうなずいている。「家族からの期待が大きくて、葛藤があったのかもしれません」。とつとつと語る男性。言葉を重ねるうちに、表情に明るさが見えるようになった。

居場所発信「いつでもおいで」

「家族は見守ってくれましたか」。男性がひとしきり話し終えた後、サロンの運営責任者で精神科ソーシャルワーカーの鈴木美枝さん(73)が語り掛けた。ほかの参加者も「鬱になると気持ちが沈んでしまう」「出て行って話せる場所があると気持ちを整理できる」とつないでいく。

サロンは美枝さんの提案で、2009年11月に始まった。「相談したくても、



「でてこうし」で語り合う参加者。鈴木美枝さん(右)は「出て行ける場所を用意して、情報を届け続けることが大切」と話す

市川三郷町

募集した。名称は甲州弁で「できませんか」を意味する「でてこうし」に決めた。

自宅にこもっている人に、どうやって情報を届けるか大きな課題だった。メンバーで話し合い、サロンの様子を伝える「でてこうし通信」を発行することにした。「回覧でいいですか」という町職員に、美枝さんは首を横に振った。手元に残らなければ、必要なときに見ることができな

けるうちに結果として表れた。初めて訪れる人の多くが、ずいぶん前に配ったチラシを手に入っていた。美枝さんはしわくちやの通信を見て「何度もためらったんだらう」と想像する。

「今までは気分がすっきりしませんでした。少しまだ楽になりました」。昨秋に発行した通信には、サロンに参加した冒頭の60代男性の手書きの感想を掲載した。「悩んでいる人、でてきませんか」という男性の呼び掛けに、通信を見た人から「行ってみよう」と連絡があった。

ひきこもりの当事者が「外の世界と、もう一度つながりたい」と考えるタイミンは、それぞれだ。そのときに、安心できる居場所はもちろん、出て行く先の情報がなければ、関わりを持ちたくてもつながれない。情報を発信して、待ち続ける。「あなたは独りじゃない」というメッセージとなり、まだ見ぬ当事者の支えになると信じて。

まだ見ぬ相手に声かけ

どこに行けばいいかわからず悩む人の居場所をつくらう。そう町に働きかけた。前に勤めていた県外の医療機関には利用者が集ま

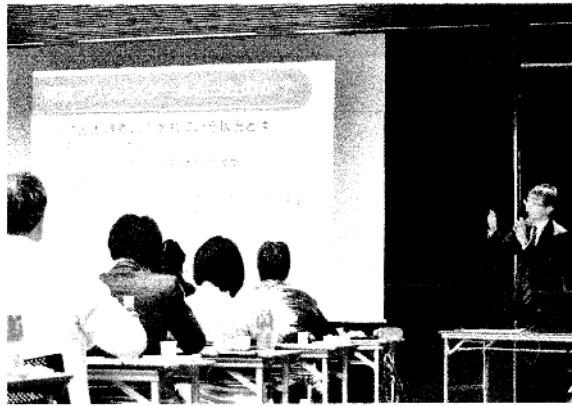
る場所があり、みな不安な胸中を打ち明け合うことので落ち着きを取り戻す姿を見てきたからだ。

当時、町福祉支援課長だ

その思いは、サロンを続

扉の向こうへ

第8部 差し出す手 ⑤



2月に企業向けに開かれた、ブリッジスクールの勉強会。校長の小泉晃彦さんは「皆さんに関わってもらおうことで、当事者の社会復帰の機会が増える」と呼び掛けた＝甲府市内(撮影・木下澄香)

就労へ体験型`学校、開校

山梨発 ひきこもりを考える 56

2013年に閉校した、北杜市の旧日野春小。この学びやにきょう24日、新たな学校が開校する。ひきこもりの当事者など、社会と距離を置いていた人の就労を支援する「ブリッジスクール」だ。運営の中心は、社会福祉法人八ヶ岳名水会

「僕ら福祉の関係者だけ

いよ」とか「体験してこらえまけんか」八ヶ岳名水会は20年以上にわたり、障害者や触法者

つていける」というイメージや自信を持つことができない」と小泉さん。企業に見学や体験の場を提供してもらい、理解と支援の輪を広げること、当事者の社会復帰の機会が増える、と考えている。

以外にさまざまな立場の人が関わることで、支援の選択肢が増え、一人一人に合った進路の実現を目指すことができるという。

やっていける 自信育む

が担う。ブリッジスクールは、就労を目指すに当たってサポートが必要なる人を対象に、6月から来年3月までの10カ月間開かれる。社会のルールや働くための生活習慣、基礎学力を身につける講座のほか、職場見学や

では、このブリッジスクールはうまくいきません。2月に開かれた県内企業向けの勉強会。ブリッジスクールの校長を務める小泉晃彦さん(左)は、集まった約30の企業と団体の出席者に呼び掛けた。「すぐに働く、ではなくて、『見に来てい

受け入れてくれる環境が用意されていることで、当事者は「一歩」を踏み出しやすくなる。つまりいても、理解して応援してくれる人がいることで、社会とのつながりが簡単に切れてしま

支援の舞台を、福祉の枠の中から地域社会へ広げようとする取り組みが始まった。

扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える 57

第8部 差し出す手 ⑥

「サポステは良くない。当事者の気持ちを考えず、働かせようとするばかりで」。昨秋に甲府市内で開かれた、ひきこもりの子をもつ親の会「山梨県桃の会の定例会。ぐんない若者サポステーション（ぐんないサポステ、富士吉田市上吉田2丁目）のスタッフ津田博幸さん（69）は、当事者支援について解説する講師の厳しい指摘をじっと聞いていた。「上から目線」との苦言。「それが、いまのサポステへの当事者の評価なんだ」と受け止めた。

サポステは「地域若者サポートステーション」の略

サポステを交流の場に

称。厚生労働省の事業で、ひきこもりやニートの15〜39歳の若者を対象に、職業的な自立などを促すために設けられた相談窓口だ。事業は2006年度に始まり、現在全国に160カ所ある。

「ぐんないサポステ」は13年度にオープンしたばかり。津田さんは運営委託を受けた会社の一員として、準備段階から携わった。開



「ぐんないサポステ」のオープンスペースで語り合う若者。ひきこもり当事者の就労支援だけでなく、交流の場も提供している
—富士吉田市上吉田2丁目（撮影・前島文彦）

就労支援だけじゃない

設初年度は、相談を受けていた。2年目に入り、からなるべく早く就労訓練につなげることに軸足を置

設初年度は、相談を受けていた。2年目に入り、からなるべく早く就労訓練につなげることに軸足を置

「ぐんないサポステ」は13年度にオープンしたばかり。津田さんは運営委託を受けた会社の一員として、準備段階から携わった。開

「ぐんないサポステ」のオープンスペースで語り合う若者。ひきこもり当事者の就労支援だけでなく、交流の場も提供している
—富士吉田市上吉田2丁目（撮影・前島文彦）

「ぐんないサポステ」のオープンスペースで語り合う若者。ひきこもり当事者の就労支援だけでなく、交流の場も提供している
—富士吉田市上吉田2丁目（撮影・前島文彦）

「ぐんないサポステ」のオープンスペースで語り合う若者。ひきこもり当事者の就労支援だけでなく、交流の場も提供している
—富士吉田市上吉田2丁目（撮影・前島文彦）

⑦

「何もせずにいられない」